

平成31年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	長久手市	
施 設 名	長久手市文化の家	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・人材養成事業・普及啓発事業	
内定額(総額)	6,400	(千円)
公演事業	3,598	(千円)
人材養成事業	2,509	(千円)
普及啓発事業	293	(千円)

1. 事業概要

(1) 平成31年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	B'Rock オーケストラ・コンサート	2019年9月12(水)	出演：B'Rock オーケストラ、ルーシー・ホルシュ、柴田俊幸	目標値	500人
		文化の家 森のホール		実績値	793人
2	声と未来 ハロウィーン企画	2019年10月27(日)他	出演：愛河里花子、かかずゆみ、坂本千夏、ピアノカの魔術師	目標値	500人
		文化の家 森のホール		実績値	389人
3	ままごと「ツアー」長久手公演	2020年1月25(土)、26日(日)	出演：劇団ままごと ほか 演目：「ツアー」、「タワー」	目標値	400人
		文化の家 森のホール		実績値	622人
4	長久手演劇王国 Vol.19 日本劇作家協会東海支部プロデュース「劇王Ⅻ～原点回帰(仮)」	2020年2月8(土)、9日(日)	出場劇作家：鏡味富美子、斜田章大、山口敦史、関戸哲也、天野順一郎、田村優太、長谷川彩、ごまのはえ	目標値	600人
		文化の家 風のホール		実績値	714人
5	創作歌舞伎「牛若丸」併演「歌舞伎の楽しさ」	2020年2月29日(日)他	出演：前進座 演目：牛若丸	目標値	500人
		文化の家 森のホール		実績値	35人(本公演中止のためワークショップのみ)
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

(3) 平成31年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	エデュケーション・プログラム 中学校であーと	2019年6月～7月	出演：愛知県立芸術大学学生及び卒業生 ほか	目標値	540人
		市内全中学校(3校)		実績値	575人
2	エデュケーション・プログラム 小学校であーと	2020年2月～3月	出演：愛知県立芸術大学学生及び卒業生 ほか	目標値	長久手市内全6小学校での実施(継続)
		市内全小学校(6校)		実績値	105人 (1校のみ実施)
3	福祉であーと	通年	出演：石川貴憲、丸尾祐嗣、菅原拓馬、ほか	目標値	100人
		病院、高齢者施設、障害者施設など		実績値	705人
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

2. 自己評価 (1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p> <p>本市の文化施策は、長久手市文化芸術マスタープランに基づき市の文化芸術施策の基本理念「ともに創る きらめく長久手」を実現するために、「誰もが参加でき、充実を得られる文化芸術環境」「芸術のまちアイデンティティの確立」「文化芸術を活かしたまちづくり」の3つの基本方針のもと実施されている。</p> <p>本市は市内に愛知県立芸術大学があり、在学をはじめ卒業生などが職業を「芸術家」として住民登録している市民が人口の約1%おり、これは全国的にも非常に高い水準で「アートのまち長久手」を特徴付けている。</p> <p>また、平均年齢39歳と日本一若いまちであり、子育て世帯も年々増加している。よって、文化の家が核となり、質の高い舞台芸術公演を行うと同時に子育て世代の多い現状やニーズを反映して子どもたちが誰でも参加できる場を提供することで、芸術が市民に身近なものとなり、子どもたちの感性を育み、本市が「芸術のまち」であることを実感でき誇りに思えるようなまちづくりを推進する目標を掲げ事業を展開した。</p> <p>令和元年度は、声と未来ハロウィーン企画、創作歌舞伎「牛若丸」はじめ、約10本の子ども向け自主事業を実施し、乳幼児から高校生まで、多くの子どもたちが芸術文化に触れる機会を創出した。人材育成においては、優れた技術や芸術性、高い知識を有する芸術家や専門家の卵ともいべき人材を「創造スタッフ」として委託契約を結び、若い人材を育てる機会を創出することを目標とし、様々な演奏会やパフォーマンス、アウトリーチを地域で行った。また社会包摂的な観点から、普及啓発事業において新たに「ふくしであーと」事業を始めた。高齢者施設や障害者施設などへ出向き、普段生演奏に触れることができない方に生演奏を届けることで、施設利用者の心身の健康増進を図るとともに、利用者とケア者の関係性の向上にも寄与した。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p> <p>長久手市文化マスタープランの理念を実現させるため、多くの市民団体や教育機関などの協力を得て事業を展開している。特に、子どもが誰でも参加できる場の提供として行われるアウトリーチ事業「小中学校であーと」では、教育委員会や各小中学校と密接に連携を取り教育関係者への理解を求めつつ、実演家においては、市内にある愛知県立芸術大学の学生を選定することで、若手アーティスト育成の役割を果たしている。新規事業の社会包摂事業「ふくしであーと」では、日本福祉大学の協力を得ることで、様々な医療機関や地域包括センター、高齢者施設、障害者施設などと繋がることができ、普段生演奏に触れられない方に音楽を届け、芸術を通して様々な課題解決に繋げることができている。</p> <p>また、マスタープランに定める「市民参画事業」として、友の会組織であるフレンズスタッフや映画上映のための市民組織であるシネマ倶楽部など、市民が積極的に文化芸術活動を通して集い繋がることで、市民の健康寿命の向上に寄与している。</p> <p>質の高い舞台芸術鑑賞事業を実施する際には、長久手市観光交流協会に広報宣伝協力を得たり食を通じたマルシェを同時開催するなど、コラボレーションすることで舞台芸術鑑賞の裾野を広げるとともに、アートと通じたまちづくりにも繋がっている。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

公演事業においては、アンケート項目を元に事業の充足度を測るものとして公演の満足度、スタッフの対応への満足度、リピート率を目標値として設定した。令和元年度は、採択されたB' Rock オーケストラコンサート、声と未来ハロウィーン企画はじめ、約10本の子ども向け自主事業を実施し、乳幼児から高校生まで、多くの子どもたちが芸術文化に触れる機会を創出した。その結果、公演の満足度（公演アンケートにて“とてもよかった”または“よかった”と回答した割合）が平均91.7%と目標の90%を上回り多くの方に満足していただけた。また、リピート率（公演アンケートの来館回数にて“今回が初めて”以外に回答した割合）が平均48.2%と目標の30%を上回る結果となった。スタッフの対応満足度に関しては、おおむね「とてもよかった」や「よかった」というアンケート結果をいただきましたが目標値には僅かに及ばなかったため、今後、市民スタッフ、ボランティアスタッフはじめアーティストとの交流を通じて、すべてのスタッフのホスピタリティを強化していく。

人材育成事業においては、市民劇団の自立支援や若手アーティスト育成制度である創造スタッフの育成支援などを目標とし、地域貢献度、公演満足度、自立度、を目標値に設定した。地域貢献度（地域イベント等、地域活動に関わった事業の本数で効果測定）としては、児童館、学校、福祉施設などへのアウトリーチ、祭りなどの市内行事への参加、近隣市町への出前ワークショップなど幅広く活動した。観光交流協会との連携した地元神社での演奏会にはのべ1600人が来場し、地域の文化振興に繋がった。また、公演の満足度においては、アンケートにて“とてもよかった”または“よかった”と回答した割合が91.5%と90%の目標を上回った。市民劇団の自立度に関しては、これまで会館スタッフが作成していた公演チラシや広告宣伝用看板などについて、チラシデザイン、印刷等作成業務をすべて劇団で作成し及び支出し、自立した活動への一歩に繋がった。創造スタッフ制度については、音楽、美術、演劇、舞踊の各分野で事業の企画・運営・サポートに関わるとともに、児童館、学校、福祉施設などへのアウトリーチ、市内行事への参加、観光交流協会との連携イベントなど市内全域で幅広く活動し、それぞれの個性と専門性を発揮し地域住民に還元することができた。

普及啓発事業においては、アンケート項目を元に公演の満足度と興味の誘発度を目標に設定した。アウトリーチ事業に関しては、次代を担う子どもをはじめ、生の舞台公演や芸術作品をあまり鑑賞しない市民、文化の家まで足を運ぶことが少ない高齢者など、文化芸術に触れることが少ない市民を対象に、文化の家で公演や市内各地に出向いて公演を実施した。その結果、公演の満足度（公演アンケートにて“とてもよかった”または“よかった”と回答した割合）が平均97.3%と目標の90%を上回り多くの方に満足していただけた。将来の文化の家利用者やアートへの関心層育成のきっかけとするための興味の誘発度においても、アンケートにて“また聴きたい”と回答した割合が平均93%と目標も90%を上回り、どちらも目標値を達成できた。

小学校であーとは、新型コロナウイルスの影響で6校中1校のみの実施となったが、中学校であーとにおいては市立中学校全3校の1年生およそ540人が音楽室でのプログラムを体験。事前に実施したアンケートの「授業以外で楽器を演奏する機会がありますか」の項目に対しては、多くの生徒が「ない」と答えており、また「生演奏を聞いたことがあるか」の項目に対しては、約4割の生徒が「ピアノはある」と答え、約3割の生徒「全くない」と答えていたため、普段音楽に触れる機会の少ない子どもたちが楽器について知る機会となった。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

各事業において、観客の興味関心を高めアートを通じたまちづくりを達成するべく、関連事業の企画や市民参加の検討を行い、各アーティストや関係団体との調整、協議を重ね、公演の十分な広報宣伝期間を考慮した上で事業期間を設定した。

公演事業の B' Rock コンサートにおいては、来場者 793 人と目標値 500 人を大きく上回り、収益率についても 68.1%と目標の 64%を上回った。主な出演者が海外アーティストであったが、出演者の 1 人であるフラウトラヴェルソの柴田氏を中心に連絡を取り合い、1 か月前には市観光交流協会や国際交流協会の協力のもとイベントでミニコンサートを開催し、前日には小学校招待公演を実施した。声と未来ハロウィーン企画については、企画制作の NPO 法人声と未来、協力の地元子育て支援団体 ARTIMEET と密に連絡を取り合い、本市の状況に合うように関連企画及び本公演のプログラムを計画した。来場者 389 人と目標の 500 人には及ばなかったが、NPO 法人声と未来にとって今回が初めての愛知公演であったため、今後の足掛かりとなった。

演劇事業において、劇団ままごと公演では新作をクリエーションしたため、1 週間の滞在となり劇団員が集中して制作する環境を提供できた。また、2003 年から続く短編演劇のコンペティション「劇王」は、チラシデザインやテーマを一新するべく日本劇作家協会東海支部と半年以上の打ち合わせを重ね、制作した。学生の来場者を増やすため学生に劇王を体験してもらう新企画「げきたまご」を企画し、演劇経験不問で集まった中学生から大学生が 11 月～2 月の 4 ヶ月間短期集中で稽古を行い、劇王期間の関連企画としてステージ上演し審査員からもコメントをもらった。短い期間ではあったが、プロの演出家や俳優、舞台スタッフともに作品を作り上げる経験は彼らにとって貴重な財産となった。入場者数、収益率においてもともに目標値を上回った。

公演事業全体における事業費について、創作歌舞伎「牛若丸」は新型コロナウイルスの影響で本公演が中止になってしまったが、それ以外においては平均収益目標が 52%に対して、結果的平均に 72%と大幅に上回った。

人材育成事業における創造スタッフ制度については、年間通じて各アーティストの育成支援を行った。積極的な企画の立案に対して、創造性や公共性、地域への貢献性など共に検討し、実施の後のフィードバックなども丁寧に行った。またジャンルの異なるアーティスト同士が関わる企画を積極的に実施することで、アーティスト同士で高め合える環境を作った。また、市民劇団や市民合唱団は年間通じて活動の自立支援を行うとともに、自己満足のための活動で終わるのでなく、地域貢献や仲間を増やすなどモチベーションを高めていけるよう、定期的なコミュニケーションを図った。

普及啓発事業における福祉であとと事業では、月に 1～2 回のペースで病院や高齢者施設、障がい者施設での演奏を計画したがニーズが多く実際には月 3～4 回になる時もあった。現在は 1 人の福祉系フランチャイズアーティストを軸に展開しているため、今後は社会包摂事業に関わるアーティストを積極的に育成していく必要がある。目標人数においては、総参加者数が 705 人と目標の 100 人を大きく上回り、予想以上のニーズがあることを実感した。小学校であとに関しては新型ウイルスの影響で 6 校中 1 校のみの実施となり、総参加者数も 100 人と目標の 700 人を大きく下回ったが、中学校であとに関しては予定どおり 7 月に 3 校実施し、目標どおり 575 人の生徒に音楽を届けた。事業費についても計画どおりとなった。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

劇場・音楽堂等を象徴する人物、キーパーソンについて、当劇場は長久手市の直営館であり、3名の舞台芸術専門職員と一般事務職員により事業業務及び管理業務を行っている。事業計画については、専門職員である事務局長及び事務局長補佐をメインに、地域のニーズや文化マスタープランの重点施策に基づいて決定。また直営館であるため、少子高齢化や繋がりの希薄化、孤独死やひきこもりなどの様々な社会課題に対して、文化芸術を通じてアプローチするために他部署と連携を取りやすい。社会包摂事業においては高齢者福祉担当部署、質の高い舞台芸術鑑賞事業においては観光部署と密に連携を取ることで、アートが一部の人のものでなく生活に身近なものとなり、アートを通じたまちの賑わいや絆づくり、課題解決を推進している。

また、やがて訪れる人口減少を見据えて市民の一層の主体的参加を図るため、2018年から市民館長を登用した。子どものための舞台芸術鑑賞団体であるおやこ劇場の事務局長を長年務め、1998年に策定した本市文化マスタープランの策定から携わっており、子どもの芸術鑑賞を専門に本市の文化芸術事業を熟知している。よって、市民の立場からの意見やアイデアを積極的に取り入れ、より一層市民にとって「我が家」を感じるような親しみ深い施設を目指す。

公演、人材育成、普及啓発の企画内容や芸術性に関して、人材育成事業における創造スタッフ制度は、愛知県立芸術大学の卒業生を中心に積極的に地元アーティストを起用している。契約期間は1年単位であるが、経験値や評価を上げるために何回かは契約を更新できるフレキシブルな仕組みになっている。また、創造スタッフを卒業した後も必要に応じて関わりを持つことで、文化の家にとっても貴重な財産となっており、このように常に地域の新しい才能を発掘、育成することで、文化的なまちづくりに繋がっている。令和元年度は美術、音楽、舞踊、演劇と幅広いジャンルのアーティストと契約を結び、各ジャンルにおける企画だけでなく、他ジャンルとコラボした企画も多く実施した。また、普及啓発事業において令和元年度からの新規事業である社会包摂事業「ふくしであと」を実施した。創造スタッフを卒業したアーティストと福祉事業に特化したフランチャイズアーティスト契約を結ぶとともに、日本福祉大学との連携により、この1年で大きな広がりを見せた。毎月1~2回程度、様々な福祉施設や地域のサロンでの演奏を実施し、認知症患者が多く入居する施設では演奏実施後は利用者さんが落ち着いて穏やかになり、その後のケアがスムーズになったという報告もあった。重度の患者を持つ医療期間においては、患者さん1人1人のリクエストで生演奏を披露し、演奏後はコミュニケーションをとるといった丁寧な対応をすることでとても喜んでいただけた。

文化芸術情報の整理、蓄積、提供、発信としては、平成24年度から開始したSNSで、事業等の様子を逐一報告するようにし、随時情報を受け取れるような取り組みをしている。会館の運営するFacebookでは、「いいね！」獲得数が1,500を超えた（令和2年5月現在）。ブログやツイッターも活用し、動画や写真を掲載するなど視覚的、聴覚的な広報活動を積極的に行っている。紙媒体の広報に関しては、情報誌「ハレとケ」を発行し、公演チラシだけでは伝えきれない公演の意義や出演者裏話や、会館の活用方法の提案、普及啓発事業のレポート等、会館の取り組みをより広く伝える仕組みを作っている。また情報誌とは別に、年3回文化の家事業の集合チラシを作成し、今まで興味がなかったジャンルの事業にも顧客の目が向くように工夫している。それとは別で、ダイレクトメールによる情報発信を毎月実施している。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

子育て世代の人口増加を背景に、子どもに身近な場所で質の高い芸術を体験させたいという要望が年々顕著になり、それに応えるため子ども向けの普及プログラムは毎年充実させている。2年に1度開催する子ども向け音楽イベント「おんぱく」では、まちなかコンサートを市内全域で行い、乳幼児から本格的なコンサートに気軽に参加できる機会を創り、そのほか優れた海外作品の招聘など、乳幼児に向けたプログラムの充実を図ってきた。令和元年度の公演事業におけるB'Rockコンサートでは、長久手市文化芸術マスタープランの基本方針1「誰もが参加でき、充実を得られる文化芸術環境」を基に、質の高い演奏を安価に提供するとともに、市内の小学生向けの招待公演も実施した。初来日となったリコーダー界の天才少女、ルーシー・ホルシュとの共演は、子どもたちにとって身近な楽器リコーダーのトップレベルの演奏を聴く機会になり、音楽への興味の誘発や、生の舞台や芸術を見る機会や一流アーティストとの貴重な交流の場となった。これによって、子どもたちの健やかな成長に資するとともに、長久手市は芸術家が多く住む「芸術のまち」であるという認識に繋がり、まちに誇りを持つシビックプライドに繋がっていくことを期待する。

また、芸術性の高い舞台との出会いを求める市民の声に応じて、トップレベルのクラシックや演劇の招聘公演を毎年実施している。2003年から続く日本劇作家協会と連携した短編演劇コンペティション「劇王」も令和元年度はリニューアルして開催。関連企画として学生向け演劇ワークショップを実施するなど、学生の集客を増やす取り組みを実施した。演劇鑑賞人口の裾野を広げる企画として、長久手で始まったこの企画だが、現在では全国的に展開するなど広がりを見せてきているため、シティセールス及び文化の家セールス事業としても展開している。また、東海地方の若手劇作家がこの企画を目標として定着してきており、東海の小劇場界の活性化、演劇事業全体の活性化につながる事業となっている。

市民が主役の作品創造や発表の場づくりとしての自主創造事業では、開館当初から市合唱団と市劇団を支援している。マスタープランの基本方針「誰もが参加でき、充実を得られる文化芸術環境」の基づき、敷居の高い文化芸術というジャンルにおいて、誰もが気軽に参加できる環境を作ることで、学生、主婦、高齢者、会社員など様々な社会属性の市民が参加でき、文化芸術を身近に感じられる場となっている。団員による主体的な活動への展開を支援することで、市民を行政施策の受益者としてではなく、主体的な文化活動者と考え、自立的な文化活動が展開できる環境整備を進めている。また、市民参画事業においては、映画上映会「シネマ倶楽部」や文化の家友の会組織「フレンズ」など、市民が文化の家に親しみを持ち、主体的に参画する機会を設けるため、市民それぞれの関心や意欲に応じて鑑賞・企画・運営支援・PR支援など自分にあった参加ができる、身近な市民参画の機会を充実するとともに、市民参画組織の運営を支援している。

普及啓発事業においては、次代を担う子どもを始め、普段外にでられず生の演奏や芸術作品を鑑賞できない高齢者や障がい者など、文化芸術にふれることが少ない市民を対象に、教育委員会や日本福祉大学、地域の団体と連携して出張公演を実施している。市内小中学生を対象にしたアウトリーチ事業は10年以上継続して行っており、市内小学校全生の6校と中学校全校で生演奏をお届けする芸術と出会う機会を提供した。また、実演家として愛知県立芸術大学の学生や地元アーティストを起用することで、未来の文化芸術を担う若手にアートが持つ力や担うべき社会的な役割について考えるきっかけづくりにもり、大学と連携することでお互いにとっていい役割を果たしている。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

長久手市文化芸術マスタープランの基本方針に基づき、「普及・啓発事業」「鑑賞・体験事業」「アートのまち創造事業」「市民参画事業」「情報事業」「活動空間提供事業」の6つの柱を軸に事業を展開している。主催事業については、アンケートを分析し、情報入手経路や、住所から、マーケティング情報や、開演時間、公演の選定などに反映させている。また、隔年で実施している「おんぱく」については、名古屋芸術大学に委託し効果測定を実施。事業実施については、常に文化芸術マスタープランに沿って計画しており、全ての事業の指針となっている。

人材面における人事戦略においては、市民館長制度を採用することで市民の声を積極的に取り入れるとともに、より一層の市民参加を推進していく。また、令和2年4月から新しく舞台芸術に特化した専門職員を1名採用し、今後の会館運営を担う人材として育成していく。臨時職員については、愛知県立芸術大学や名古屋芸術大学の学生や卒業生などを積極的に採用することで、直営館では避けられない人事異動のリスクを軽減させるとともに、事業の企画運営にも役立っている。またチラシデザインを担うスタッフについては、毎年愛知県立芸術大学の在学生起用し、制作の現場でノウハウを学ぶ機会を提供するとともに、文化の家としても会館スタッフとして安価にデザイナーを雇うことができるため、お互いにとって有効な関係性が築けている。

また、人材育成に関しては、他館との交流も積極的に行われており、愛知県公立文化施設協議会主催新任職員向け研修「愛公文セミナー」への参加や一般財団法人地域創造主催のステージ・ラボに毎年1名派遣のほか、子ども向けの海外演劇公演を複数館で連携して招聘するジョイントフェスティバルにも参加している。その他、「音壺会議」では主に音楽事業における情報交換、「名古屋ホール運営協議会」では施設管理など運営全般の意見交換など、近隣他館とのネットワークも充実させている。管理職にあたっては、各種研修の講師や大学授業の講師なども積極的に行っている。また、平成29年度から南山大学経営学部教授に広報アドバイザーを依頼し、月に1回広報マーケティングについて学ぶ職員研修を実施している。

財政面においては直営館のため市の財政状況が大きく影響し、今後は社会保障費が増加し文化振興にかかる財源が減少していくことが見込まれ、当館ハード面においても5年後に特定天井工事を予定している。よって、限られた予算の中で充実した文化芸術事業を展開するため、積極的に市民参画を推進し自立した市民組織を育て連携していくことで、コスト削減だけでなく、市民のやりがいや居場所作り、つながりを醸成していく。例えば、昨年12回目を迎えた「ながくてアートフェスティバル」では、市内の美術作家有志が実行委員会を構成し、フェスティバルを継続してきたことで、市民が自由に自律的に企画運営するシステムが確立している。吹奏楽フェスティバルでは、実行委員会を組織し、地元企業の協賛金を財源に自立した運営を目指す。また、市民でつくる子どものための鑑賞組織である長久手おやこ劇場と連携し公演の企画運営を行い、子育て世代のニーズを反映させるために「おんぱく」に企画段階から関わってもらうなど団体との協力も進めている。また、会員組織フレンズは例年約300人以上が会員となり、結成以来、自主事業のサポート、自主企画の実施、機関紙の発行、研修などの活動を充実させ、自立した運営体制を確立してきた。

「文化力」をまち全体で活かす「市全体の文化マスタープラン」においても市民と協働で策定し、策定にあたり文カフェ（市民ミーティング）で市民の多様な意見を集め、市民主体で話し合う市民検討会議を開催し、市民と行政のパートナーシップによる検討を丁寧に行ってきた。